



自己のストーリーを構成する自伝的推論の過程モデルの研究

中園, 佐恵子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2025-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第9097号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496378>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

論文内容の要旨

氏名 中園 佐恵子
専攻 人間発達専攻
指導教員氏名 相澤 直樹

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

自己のストーリーを構成する自伝的推論の過程モデルの研究

論文要旨

本研究は主に記憶研究の分野を中心に検討されてきた自伝的推論について、臨床の語りに関連する過程を検討し、自伝的推論の過程モデルを提示した。第1章から第5章の第1部では問題と目的について述べた。自伝的記憶は自己と関連する記憶で、自己にとって重要な記憶である。自伝的記憶にはストーリーを構成し、ストーリーとして想起されるという特徴がある。自伝的記憶のストーリーの構造を作り出すのが自伝的推論である。自伝的推論は特にライフストーリーのような自己のストーリーを構成する。自伝的推論は記憶が自己をどのように支えるかを明らかにする上で着目することが不可欠だと先行研究で指摘されている。自伝的推論がライフストーリーのような自己のストーリーを構成するを通して、自伝的記憶が自己を支える可能性がある。また、自伝的推論が精神的健康に影響する可能性もある。それだけでなく、自己のストーリーを構成する自伝的推論の過程は臨床の語りの活動に関連する可能性もある。ナラティブ・セラピーやロゴセラピー、ライフストーリーワーク、回想法などの取り組みの背景には自己のストーリーを構成する自伝的推論の過程があると思われる。臨床の語りに関連する自己のストーリーを構成する自伝的推論の過程を検討することで、今後の臨床実践に役立てることができるという意義がある。自伝的推論は重要な過程であるが、自伝的推論の詳細な過程は明らかになっていない。また、記憶研究の分野を中心に検討されてきた自伝的推論について、臨床の語りに関連する自己のストーリーを構成する過程を詳細に検討することは今後の臨床活動に役立つと考えられる。そこで本研究では、自伝的推論がどのように自己のストーリーを構成するか、その詳細な過程を検討し、一貫したモデルを提示することを目的とする。本研究の自伝的推論は自己にとってどのような意味があるか出来事を意味づけ、自己のストーリーを構成する過程と定義した。また、自伝的推論の中心的な働きとなる自己と出来事のつながりに着目する。

第2部では本研究で行った3つの調査研究について報告した。第6章の研究1は複線径路等性アプローチを用いて一人一人の自伝的推論の詳細な過程を語りを通して検討した。その結果、過去の出来事を振り返ると回答した協力者の自伝的推論の過程から、TLMGの第二層の各時期で自伝的推論による意味づけが起こることで、第三層の自己の信念・価値観にまで意味づけが影響

するような過程が見られた。一貫して、同じ自己の信念・価値観が移り変わる過程を語る協力者と時期ごとに全く異なる自己の信念・価値観を語る協力者が見られた。過去の出来事を振り返らないと回答した協力者は自伝的推論の意味づけ自体が少ない場合や、自伝的推論による意味づけが自己の信念・価値観に影響した後、その意味づけが変わらず維持される協力者も見られた。また、辛い時期を乗り越えて成長するとポジティブに意味づける自伝的推論や環境の変容を意味づける自伝的推論も新たに見られた。

第7章の研究2では自伝的推論の全体的な過程を修正版グラウンデッドセオリー・アプローチで検討した。その結果、以下のような過程が示された。はじめに過去の出来事の振り返りやすさについて確認していた。次に時系列順に過去の自分から現在の自分までを振り返り、それぞれの時期でよく語られる自分と全体を通してよく語られる自分が見られた。過去、現在、未来の自己を含む自己のストーリーを語っていた。その結果、自分が変わった点や、自分は変わらない点に気づいていた。この過程は、過去から現在までの自己を振り返って比べる自伝的推論の働きと関連する過程であると考えられる。この過程に加えて、ありのままの自分でいられるという自分の在り方を考える、周りの他者と自分の関係について考える自伝的推論の広がりも見られた。

第8章の研究3は自伝的推論がどのようにアイデンティティや精神的健康に関連するかという臨床に関わる面を量的に検討し、得られた知見をモデルに加えた。人生において最も重要な出来事を想起してもらい、出来事の快・不快度から協力者をポジティブ群とネガティブ群に分けた。ポジティブ群の方が詳細な記憶を想起していた。相関関係については、ポジティブ群とネガティブ群の出来事を中心性とアイデンティティの確立が正の相関関係にあり、アイデンティティの確立と人生満足度、心理的well-beingの全ての下位尺度が正の相関関係にあった。ポジティブ群の出来事を中心性は心理的well-beingの「人格的成長」、「人生における目的」、「環境制御力」と、ネガティブ群の出来事を中心性は心理的well-beingの「人生における目的」、「自律性」と正の相関関係にあった。共分散構造分析の結果、ポジティブな出来事でもネガティブな出来事でも、人生で最も重要な出来事の記憶はライフストーリーの中核に位置づくると、アイデンティティの確立に寄与し、人生満足度と心理的well-beingの「人生における目的」に影響することが示唆された。ポジティブ群は出来事を中心性が心理的well-beingの「人生における目的」に直接、関連するパスも見られた。ネガティブな出来事であっても肯定的な意味づけや救済シーケンスの構造でライフストーリーを構成し、アイデンティティの確立に寄与すると、精神的健康に悪影響を及ぼしにくい場合があると考えられる。

第9章から第11章の第3部では研究1から研究3で得られた知見をまとめ、自伝的推論の過程モデルを提示した。自伝的推論の詳細な過程モデルでは、想起した出来事に対して第二層で自伝的推論で意味づけすることを繰り返し、第三層の自己の信念・価値観に影響を与える過程が見られた。自伝的推論が1つの自己の信念・価値観に集約する場合と自伝的推論に対応する複数の自己の信念・価値観に影響する場合があった。TLMGの第二層の自伝的推論の意味づけが第三層の自己の信念・価値観に到達して、自己の信念・価値観が一貫して移り変わる場合と自伝的推論が一度、自己の信念・価値観に到達した後、変化せず維持される場合が見られた。自己と出来事のつながり方の具体的な過程のモデルが提示された。このような第三層の自己の信念・価値観にまで影響するような自伝的推論による意味づけは、臨床の場で見られるクライアントが自分の人生を振り返り、その意味を見出すような深い語りになり得るものである。臨床活動で

見られる深い内省の背景に第二層の自伝的推論による意味づけが面接の中で繰り返され、第三層の自己の信念・価値観に影響する過程があると思われる。臨床の場ではセラピストの助けを借りて、このような自伝的推論の過程からより深い人生の語りにつながっていくと考えられる。

自伝的推論の全体的な過程モデルにおいては、人生で最も重要な出来事はライフストーリーに統合するとアイデンティティの確立に寄与し、人生満足度と心理的well-beingの「人生における目的」に影響する過程が見られた。ポジティブな最も重要な出来事はライフストーリーに統合されると直接、心理的well-beingの「人生における目的」に関連する関係も見られた。また、ネガティブな最も重要な出来事であっても肯定的な意味づけを行うか、ライフストーリーを最終的にはポジティブな結果でまとめる救済シーケンスの形式にしていると、アイデンティティの確立に寄与し、精神的健康に悪影響を及ぼしにくい場合があると考えられた。自伝的推論の過程については、記憶を想起し、自伝的推論を行って過去、現在、未来の自己を含む自己のストーリーを語った結果、自己が変わったこと、もしくは変わらないことに気づくまでの過程のモデルが提示された。自伝的推論を行う中で、ありのままの自分でいられるなど自己の在り方や、自己と周りの他者の関係についてまで振り返りが及ぶ過程も見られた。先行研究で意味づけのみが提示されていた自伝的推論の過程であるが、どのように自己のストーリーを語り、自己が変わった点や変わらない点に気づくかという詳細な過程モデルを提示した。自己のストーリーを語って自己の変化に気づく過程はナラティブ・セラピーでドミナント・ストーリーの代わりに自分らしい新たな観点のオルタナティブ・ストーリーを語る過程と関連すると思われる。セラピストの助けを借りて、自己のストーリーの語りを深める中で新しい自己の在り方に気づき、ドミナント・ストーリーに代わるオルタナティブ・ストーリーを語るようになっていくと思われる。

本研究は、先行研究では記憶研究の分野で検討されてきた自伝的推論の過程について、臨床の語りに関連する自己のストーリーを構成する詳細な過程について検討した。自伝的推論の詳細な過程モデルでは、どのように出来事が意味づけられ、自己の信念・価値観に結びつくかという自己と出来事のつながり方の具体的な過程のモデルが提示された。自伝的推論の全体的な過程モデルにおいては、出来事を想起し、自伝的推論を行って自己のストーリーを語った結果、自己が変わったこと、もしくは変わらないことに気づくまでの過程モデルが提示された。自伝的推論と精神的健康の関係について、特にネガティブな出来事の記憶であっても自伝的推論の行い方次第では精神的健康に悪影響を及ぼさない可能性もあることが示唆された。

今後の課題としては本研究の自伝的推論の過程モデルの検証を進めていく必要がある。本研究の自伝的推論モデルを元に質問紙調査などを行い、多くの人に共通する自伝的推論の過程なのかどうかを検討する必要がある。本研究は主に青年期を対象に検討したため、青年期に特有の自伝的推論の過程が見られたと思われる。老年期など別の年齢の対象者にも同じような自伝的推論の過程が見られるか検討する必要がある。また、臨床の場においてうまく出来事を語るができない対象者の自伝的推論の過程や臨床の面接の中で語りながら意味づけをする自伝的推論の過程、人生の意味を見出すような深い語りにつながる自伝的推論の過程についても今後、検討する必要がある。本研究で示された自伝的推論の過程モデルが一般化できるのか、因果関係を特定できるような研究を進めて、より精度の高い自伝的推論の過程モデルを作り上げていく必要があるだろう。

(注) 3,000~6,000字 (英語の場合は1,000~2,000語) でまとめること。

論文審査の結果の要旨

氏名	中園 佐恵子		
論文題目	自己のストーリーを構成する自伝的推論の過程モデルの研究		
判定	合格・不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	准教授	相澤 直樹
	副査	教授	河崎 佳子
	副査	教授	赤木 和重
	副査	准教授	伊藤 俊樹
	副査	神戸海星女子学院大学 教授	中植 満美子
要 旨			
<p>本研究の目的は、記憶研究の分野を中心に検討されてきた自伝的推論の包括的な過程モデルを提起することにある。青年期の男女を対象とした質的量的調査研究により自伝的推論の過程を検討し、包括的な自伝的推論の過程モデルの構成を試み、その臨床的な有用性についても考察がなされた。</p> <p>第1部においては、自伝的推論に関連する先行研究を概観し、関連概念の定義と整理がなされた。その中で、自伝的推論は、自伝的記憶の特徴であるライフストーリーに日々の出来事を統合する働きと定義された。また、その働きは、ナラティブセラピーを中心に幅広い心理療法に関連することが示された。以上のことから本研究の学術的、ならびに臨床的な意義が論じられた。</p> <p>第2部では3つの実証的研究が報告された。研究1では複線径路等至性アプローチを用いて個別的な自伝的推論の詳細な検討がなされた。その結果、同アプローチの第二層の各時期に自伝的推論が起こることで、第三層の自己の信念・価値観にまで意味づけが影響する過程がみられた。また、一貫した過程を語る者と時期ごとの異なる過程を語る者、意味づけが少ない者や意味づけが変わらず維持される者など多様なパターンがみられた。研究2では自伝的推論の包括的な過程について、修正版グラウンデッドセオリー・ア</p>			

アプローチを用いた検討がなされた。結果として、過去、現在、未来の自己を含む自己のストーリーを構成する自伝的推論の過程がみられた。また、ありのままの自分であることや、周囲の他者と自分との関係に関わる自伝的推論の広がりもみられた。以上の研究成果を受けて、研究3では、自伝的推論が青年期アイデンティティと精神的健康に与える影響を検討する量的研究がなされた。青年を対象とした調査データの分析から、ポジティブな出来事の想起とネガティブな出来事の想起のいずれでも、それがライフストーリーの中心に位置づく場合には、アイデンティティの確立を媒介して心理的well-beingを高めることが示された。加えて、ポジティブな出来事は直接的に心理的well-beingを高めることも示された。前者の結果には、ネガティブな出来事であっても、肯定的意味づけや救済シーケンスにより精神的健康に負の影響を及ぼしにくい場合があることを示唆するものと考察された。

第3部では、今回の研究成果の総括的な検討がなされた。自伝的推論の詳細な過程モデルとしては、第一層における出来事に対して第二層に向けての意味づけがなされ、そこから第三層の自己の信念・価値観に影響が及ぶ三層構造の過程モデルが提示された。また、自伝的推論の全体的な過程モデルとしては、重要な出来事の想起が自伝的推論によってライフストーリーに統合されることで、アイデンティティの確立と、それによる心理的well-beingと人生満足度の促進につながるモデル、ならびに、出来事の想起から過去、現在、未来の各時期、ならびに一貫した自己のストーリー形成に至り、自己の一貫性や変容の気づきをもたらされる過程モデルが提示された。さらに、以上のような自伝的推論の過程モデルの臨床上の有用性についても論じられた。

本研究は、これまで明らかにされていなかった自伝的記憶を構成する自伝的推論について、その詳細、かつ、全体的な過程モデルを研究したものであり、自伝的記憶の研究とそれに関連する臨床実践について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって、学位申請者の中園佐恵子は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。なお学位申請者は、本研究に関わる業績として以下に示す4編の論文を主要関連学会誌等に掲載しており、他の学術論文、学会発表を含め博士学位申請の基本的要件を満たしている。

中園佐恵子 (2022). ストーリーを構成する自伝的推論の働き—自伝的記憶と自己に着目して— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,15(2), 19-26.

中園佐恵子・相澤直樹 (2023). 自伝的推論が自己のストーリーを構成する過程の検討 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 16(2), 19-27.

中園佐恵子 (2024). 複線径路等至性アプローチによる大学生の自伝的推論の詳細な過程の検討 TEAと質的探究, 2(2), 99-115.

中園佐恵子 (2025). 大学生を対象としたポジティブ・ネガティブな出来事の自伝的推論とアイデンティティ, well-beingとの関連. 応用心理学研究, 50(3) 印刷中.